



Hendrik M.J. Maier. *In the Center of Authority: The Malay Hikayat Merong Mahawangsa*. Studies on Southeast Asia No. 4. Ithaca, New York: Southeast Asia Program, Cornell University, 1988, 210 p.

Hikayat Merong Mahawangsa (HMM) というのは、マレーシアのケダー王国に関する史書ないしは物語である。著者は1978年に HMM のオランダ語訳を刊行している (*Sjeik Abdullah en de bloemen: Merong Mahawangsa — Maleise hofkroniek*. Amsterdam: Meulenhoff.)。本書はその HMM をめぐって、英国植民地官吏=学者 (Malayists) の受けとり方、そしてマレー社会における位置づけを吟味すると同時に、HMM の現代的 (著者自身の) 読み方をも提示した、著者の Leiden 大学の博士論文を元としている。hikayat, kisah, riwayat, tambo, babad と言われるものから, salasilah, sejarah, tawarikh と称されるものまで、「歴史」物語・史書・史伝のジャンルの文献を扱い解釈する際に大変参考になる著書である。

1821年シャムの侵略でペナンに逃げたケダーのスルタンは、ペナン在住の James Low に HMM の写本を送った。Low の得た写本もその原本も行方不明となったが、彼が1849年に *Kedah Annals* と題して、J.R. Logan の *Journal of the Indian Archipelago and Eastern Asia* に発表した翻訳は残っている。その後、J.T. Thomson, J.R. Logan, W.E. Maxwell, H. von de Wall が異本を入手している。これらの七、八種にのぼる確認された写本以外に、印刷して刊行されたものとしては、1898年のジャウィ版と1916年のローマ字版とがあり、1968年には Dewan Bahasa dan Pustaka, 1970年には University of Malaya Press から校訂版がでてい。著者は、これらの写本、校訂本、翻訳はもとより、R.O. Winstedt などの紹介した梗概あるいは解説・コメントなどをすべて一様にテキストとして扱い、それらに見られる引用テキストのルーツを探る源泉批評を行なっている。19世紀の筆耕人も現代

の校訂者も、物語を標準化しようとする試みにおいてはまったく同じであるというわけである。本書の中心概念となっているのは、テキストというものは細部に至るまで他のテキストからの様々な形での引用からなるというテキストの相互関係のあり方であり、表題の権威というのも、そのような相互テキスト性を規制している原理の意味である。

もう一つ、著者が HMM 理解の根底にすえるのは、一般論として W. Ong によって論ぜられ、A. Sweeny によって説得的にマレー文学について敷衍された (*A Full Hearing: Orality and Literacy in the Malay World*. University of California Press, 1987.) oral-aural 文化と印刷文化とのギャップである。具体的には、印刷文化の代表者としての英国人の HMM に対する様々な反応の中に見る。まず最初に HMM をとりあげた “merchant-scientist” Low は、スコットランド啓蒙主義の流れを汲んで、HMM の中に実際に起こった歴史的事実を見ようとした。(しかし、HMM に基づいてケダーはシャムの属国であるとする Low 説は、シャムの宗主権を否定する J.Anderson 説の権威を覆すには至らず、その権威関係は現在のリプリントの状況にまで反映している。) これに対し、次の世代の、進化主義的実証主義の洗礼を受けた “scholar-administrator” Winstedt は、HMM の内容を作り話として扱い、ケダー史を書くにあたっては殆ど HMM を参照していない。この二人に代表させて19世紀から20世紀にかけての英国人の HMM に対する反応の変化を扱った第2章、3章は、植民地支配に文化の面から光を投げかけるものとして大変興味深い。ケダー・シャム関係だけでなく、ヴィクトリア朝時代の一つの解釈でもある。

全然異なる文化の中心から権威を附与され、あるいは否定された HMM の、植民地支配下のマレー人社会でのテキスト形成ならびにその読まれ方は、当然それに影響されていく。それにも拘らず、その独自性は、物語の事実に対する referentiality ではなく、物語自体の figurality を重視する立場にあらわれてくる。これは oral-aural 文化という権威の中心から生まれでた HMM の消されざる特質とも言える。本書はその点を強調しても、しかし、実際に oral-aural 伝統として話され又聞かれていた事

書

実ないしは実態については詳しく語られない。語られるのは、英国人の収集し刊行した *HMM* テキストと、西洋の文化の中心から発信された歴史に対する考え方、あるいはテキスト批判の技術などを受容したマレー人が編集したテキストとの相違である。

著者自身の *HMM* の読み方は、最後の章に梗概として示されている。*HMM* から読みとれる一般的に妥当なトピックスとして、言語と生の問題、即ち一方では、語りの内容がどの程度事実に基づいているかという *referentiality* と語り自体が生み出

評

す説得性との間のゆれ動き、他方では、個人的な責任と神・運命・真実への屈服との間のゆれ動き、そのような問題を読者につきつけているのだと指摘する。これは現代において、伝統的マレー文献がどのような意味を持ち、いかに読まれるべきかに対する著者なりの解答でもある。

著者の作り上げたテキストを意味づけるのは読者である。豊かな読み取り方が期待される作品ではある。

(前田成文・東南ア研)